

令和4年度 第3回北海道観光審議会アドベンチャートラベル部会 議事録

1 日 時：令和4年8月30日（火）9:00～10:35

2 場 所：オンライン開催（Zoom）
（道庁9階 交渉室）

3 出席者

（1）北海道観光審議会 アドベンチャートラベル部会委員（五十音順）

荒井委員、石山委員、鈴木委員、高田委員、矢ヶ崎委員（部会長）、八木委員 計6名

（2）北海道（事務局）

山崎観光振興監、鶴蒔観光局長、後藤課長、輿水課長ほか

（鶴蒔観光局長）

ただ今から、令和4年度北海道観光審議会第3回アドベンチャートラベル部会を開催いたします。本日は、お忙しい中、ご出席いただきまして、誠にありがとうございます。議事に入るまでの間、私の方で進行させていただきます。本日の部会には、委員6名中6名のご出席をいただいております。それでは、開会に当たりまして、観光振興監の山崎からご挨拶申し上げます。

（山崎観光振興監）

皆様おはようございます。先日は、道東のアドベンチャートラベル現地視察に参加いただいた皆様、誠にありがとうございました。また、本日も、夏の繁忙期でかつ月末ということで、本当にお忙しい中、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

本日は、これまで一年以上に渡ってご議論いただきました、アドベンチャートラベルにも対応できる「新しいガイド制度のあり方」について、部会案として取りまとめていただいた上で、来月開催される観光審議会に報告いただきたく思っております。

日本でもはじめての都道府県によるガイド制度になると思います。アドベンチャートラベルにもしっかりと対応しつつ、ガイドさんが、この資格をとることによって稼ぐことができる、利用者の皆様には、このガイド資格を持っていれば安心してガイドをお願いできる、こういう制度を、専門的かつ幅広い知見から、皆さまにご議論いただいたこと、本当に感謝しております。

最後でございますが、忌憚のないご意見をお寄せいただき、より良いものになるよう、ご議論をいただくようお願いいたします。本日は誠にありがとうございます。

（鶴蒔観光局長）

本日の日程でございますが、次第に従いまして、概ね11時までを目途にご審議いただきたいと思っておりますので、ご協力をよろしく願います。それでは、これからの議事進行に関しまして、矢ヶ崎部会長にお願いいたします。

（矢ヶ崎部会長）

皆さんおはようございます。お話がありましたように、本日は、これまで1年以上かけて議論

を進めてまいりました、総まとめでございます。いよいよ審議会に来月報告する、そういう段取りまで進んでまいりました。本日もなるべく皆さんにご議論いただけるように、かつ時間内におさまるように進めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

部会の議事に入る前に、まず、参考資料としてお配りしております、前回の議事録について承認をお諮りしたいと思います。令和4年度第2回アドベンチャートラベル部会の議事録でございますけれども、これについて、皆様からご異議、あるいはご意見はございませんでしょうか。

(異議等なし)

ありがとうございます。それでは、この議事録を部会として承認するという事にさせていただきます。ありがとうございます。

それでは、これより次第の「3 議事」に入ります。アドベンチャートラベルに対応した新しいガイド制度の創設に関する提言・部会案について事務局よりご説明をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

(奥水課長)

アドベンチャートラベル担当課長の奥水です。どうぞ本日もよろしくお願いいたします。

それではATに対応した新しいガイド制度の創設についてご説明いたします。

資料1をご覧ください。資料1は概要版です。前回の部会の部分からの変更点を中心に、ご説明いたします。

まず、全体像のポンチ絵でございますけれども、資料上の下段のヨコの広がり、分野の拡大というところです。こちらにつきましては、SUP(サップ)を追加し、連携する民間の資格団体といたしましては、SIJ、日本SUP指導者協会ということになります。また、サイクリングの連携先につきましては、JCTA、日本サイクルツーリズム推進協会、こちらを追加しております。なお、SIJとJCTAに米印がついておりますが、こちらは「一部取組中の課題あり」ということで整理しております。SUPと連携する北海道アウトドアガイド資格の3分野、点線を表示しておりますけれども、こちらと併せて、後ほど詳細についてご説明いたします。

次に、資料上の中段の「技術能力基準の充足」についてですが、最低ラインを日数のみとして整理した上で、アクティビティガイドにつきましては、道マスターガイド等の推薦を要することとしました。

その上で、国際資格等につきましては、サステナビリティに関し、北海道サステナブルガイドトレーニングプログラム受講による対応として整理した上で、その先の道筋として、Leave No Trace、GSTC等の取得を追加しております。安全管理、自然・歴史・文化、顧客・グループ管理につきましては、研修受講から修了チェック合格に変更しているところでございます。こちらの方も、また後ほど詳しく説明します。

こちらのポンチ絵の要旨につきましては、次のページに、趣旨ですとか役割分担、定義等をまとめておりますので、こちらの方は後ほどご覧ください。

続きまして、資料2をご覧ください。ちょっと飛びまして、6ページをご覧ください。まず、アクティビティガイドについて、ご説明をいたします。このページ下段の要件のところです。前回の部会で、有識者等への追加ヒアリングで確定することとしておりました、技術能力基準の日数につきましては、直近2年間で200日を基本として整理しております。なお、稼働

できるシーズンは冬期間、積雪期に限られるオフピステとバックカントリーにつきましては、120日以上といたしました。

計算の対象期間につきましては、コロナ禍の影響を勘案いたしまして、当面3年間は2018年1月から2019年12月を対象とすることを可としております。また、カヌー、ラフティング、SUPにつきましては、兼業してガイドを行っている実態も多いということを考慮いたしまして、3分野の通算で200日以上となる場合も可といたしました。

この技術能力基準の充足に併せて、道マスターガイド又は、拡大する分野については連携団体の指定する技術委員等からの推薦を要することとしたいと思っております。

次に、アクティビティガイドの分野拡大につきまして、7ページをご覧ください。

中段のサイクリングについて、前回の議論で更新制度がないということが課題となっておりましたJCTAですが、技術・安全等に係る実地研修の実施及び更新制度導入の検討の意向を確認いたしましたので、団体が研修の開催又は更新制度を導入すること及びガイドが当該研修を受講又は更新したことを確認できることを条件に、連携可能といたしました。今後、研修や更新制度導入等の動向について、注視をしていきたいと考えております。

次に、マウンテンバイクについてですが、道内の主要な事業者ガイドツアーの実態をヒアリングしたところ、ハードなツアーにつきましては、道内では実質的に対応するコースがないということ、ソフトなツアーでは、舗装路など整備された道を活用している実態があるということ、JCGA、JCTAともに、eバイク、マウンテンバイク等、各種ギアを使ったツアーにも対応していることから、オンロード・オフロードでは区分せず、自転車を使用するアクティビティ全般を「サイクリング」として整理いたしました。

次に、7ページ下段をご覧ください。スタンドアップパドルボード、いわゆるSUPについてですが、道内で活動するインストラクター資格認定団体であるSIJ、日本SUP指導者協会に確認したところ、複数人数に対応できるレベル2以上のインストラクターであれば、技術面、安全面について問題なく対応できる水準を確保しているが、ガイド能力の面では課題を有するとのことでありましたので、フィールドを河川・湖沼に限定した上で、SIJの公認インストラクター資格レベル2以上のインストラクターについて、ガイド能力の担保のため、北海道アウトドアガイド資格のうち幅広く汎用性のある自然ガイド又は、同じ河川・湖沼をフィールドに兼業も期待できるカヌー及びラフティングガイドのいずれかの資格を取得することを要件に、連携することといたしました。最初にお話した、点線で3つの分野がSUPとつながっていたところでございます。

なお、8ページは、拡大する分野と連携する団体、対応する資格、9及び10ページは、拡大する分野の定義、要件、確認方法、有効期間をまとめておりますので、後ほどご確認ください。

次に、スルーガイドにつきまして、11ページをご覧ください。下段でございます要件の技術能力基準につきまして、インバウンドを含む海外旅行添乗員については、直近2年間のツアー従事日数を100日以上、通訳案内士、観光協会等ガイドについては、ガイド従事日数を同じく100日以上と整理いたしました。対象期間につきましては、アクティビティガイドと同様に、当面3年間はコロナ等の影響もあるということで、2018年1月から2019年12月を対象とすることを可としたところです。

次に、12ページをご覧ください。こちらは概要版のポンチ絵からスルーガイドだけを抜き出したものですが、このうち、下段の技術の保証、要件について、一番下から、アウトドア検定、旅程

管理主任者、英語資格がありまして、ATGSの5つの中核能力のうち、安全管理、自然・歴史・文化、顧客・グループ管理の3つの分野に関する研修の受講を赤の破線で明示いたしました。受講が要件であること自体は、前回の部会における説明から変更しておりません。

併せて、上段の国際資格等オプションについて、同じく、安全管理、自然・歴史・文化、顧客・グループ管理の3つの分野の研修についてです。前回の部会では、研修の最後に効果測定をすべきではないかとか、ガイドとして必要なレベルに達していない方もでてくるのではないかと、そういう方には付与すべきではないのではないかとというようなご意見がございました。ですので、修了チェックを行い、その合格をもって、バッジ付与としたいと考えております。

なお、先日8月11日、12日の2日間で、こちらの3分野の研修のトライアルを再度実施しており、修了チェックについても、複数の講師による目で合否判定を行いました。結果、実効性と再現性を確認しまして、トライアルに参加いただいた受講者の皆様から、研修の有効性についても評価をいただいておりますことを報告します。

次に、13ページをご覧ください。ガイドの名称について整理をしております。観光庁公表資料「アドベンチャーツーリズムナレッジ集」の「別冊 海外調査結果」というものがあります。こちらにおきまして、スルーガイド、アクティビティガイドと記載されておきまして、有識者からの異議もなかったことから、名称はこれまでと同様に、「アクティビティガイド」、「スルーガイド」としたところでございます。

次に、14ページをご覧ください。国際資格等オプションにつきまして、まず、外国語、英語コミュニケーション力です。前回の部会において、語学試験の有効期限についてご意見があり、有識者によるワーキンググループで検討いただきましたところ、資格取得後の実務経験がより重要であり、語学力証明のための資格再取得は求めないということで整理いたしました。なお、実務ベースで定期的に外国語を使っていないアクティビティガイドにつきましては、「日常会話可能」レベルの研修受講により、英語能力の確認を推奨することといたしました。

次に、15ページをご覧ください。サステナビリティについて、「北海道サステナブルガイドングトレーニングプログラム」と称しまして、ガイドの皆様へ持続可能な観光の理解を深めていただくための基礎研修を実施することとし、受講証をもってバッジの付与の対象としたいと思っております。また、研修受講後の道筋として、「GSTC公式プログラム」、「GSTCトレーナー資格」及び「Leave No Trace トレーナー資格」を、目標として推奨する国際資格として、その取得者についてもバッジの付与の対象としていくことにしております。

次に、16ページをご覧ください。ファーストエイドについて、前回の部会では、WMA、ウィルダネス・メディカル・アソシエイツ以外の野外救急法に関する国際団体の資格の取扱いについて確認することとしておりますけれども、WMS、ウィルダネス・メディカル・ソサイエティから認定されているWMAJ、ウィルダネス・メディカル・アソシエイツ・ジャパン、それからWMTC、ウィルダネス・メディスン・トレーニング・センター及びSOLO Japan（ソロジャパン）の3つを対象とすることといたしました。また、その下の表、各アクティビティにおけるファーストエイドのレベルの表ですが、前回の部会資料では二重丸や丸をつけておりましたけれども、記載方法を、前回のご指摘を踏まえ変えております。丸や二重丸の表記に関するご意見、いろいろと皆さまからいただきましたが、最低限、必須のレベルを丸、目標として推奨するレベルを星印で表すことといたしました。また、自然ガイドの目標レベルをWFAからWFAFAへ引き上げております。なお、

各分野のガイドが保有するファーストエイドのレベルにつきましては、現状維持ではなく、推奨レベルまで引き上げていく必要があることから、将来的に見直しを検討いたします。

次に、17 ページをご覧ください。安全管理、自然・歴史・文化、顧客・グループ管理につきまして、前述のとおり、2日目のフィールドワークの中で複数の研修講師による理解度チェックを行うこととし、合格基準を満たした方にはバッジ付与の対象とすることといたしました。チェック方法について、評価チェックシートの大項目の3つ「安全・危機管理」、「顧客サービス・グループマネジメント」、「自然・文化・歴史のインタープリテーション」の3つをそれぞれ、○（マル）△（サンカク）×（バツ）で判定をいたしまして、全てがマルとなった方を合格とすることといたしました。バツがついてしまうと不合格になりますが、この研修の中ですぐにバツとはならず、サンカクがつく場合もあるかと思えます。今回のトライアルでも、実はサンカクがつけられた受講者がおりました。その方について、複数の講師間でその後ご議論いただきまして、サンカクのついた方は、結局はマルなのかバツなのか、判定していただくということをトライアルでやっていたところです。同じように、最終的にマルかバツかという形で判定を行うことにしたいと考えております。

次に、18 ページをご覧ください。市場評価及び資格の価値向上について、前回の部会との変更点は、表の上から3段目、「稼げるガイドの道筋をつけて欲しい」との意見に対して、ATのコンセプトや本ガイド制度の趣旨の周知を、期待される施策として追加いたしました。また、上から5段目、「ATのガイディングにおいて自然に関する解説等が重要」との意見及び期待される施策として、他分野のガイドに対する道自然ガイドの取得推奨を追加しております。次に、下から3段目、「AT知識習得のための研修」、「アクティビティガイドの語学力維持向上の場の提供」との意見及び期待される施策として、裾野の拡大や認定後のスキル向上等の幅広い人材育成・確保の取組を追加しております。

なお、19 ページ、中期的な展開の部分については、前回の部会資料から変更はございませんので、説明は省略をさせていただきます。

事務局からの説明は以上です。ご審議について、どうぞよろしく願いいたします。

(矢ヶ崎部会長)

どうもありがとうございました。皆様方のおかげをもって、ずいぶん整理されてきましたし、分かりやすい解説だったと思います。それでは、今回は最後の部会ですので、ご説明のありました部会案全体を通してご意見をいただきたいと思います。ワーキンググループに参加された方もいらっしゃいますので、そのあたりも含めて、ご意見をお願いしたいと思います。いかがでしょう。どなたからでも結構ですので、ご自由に全体についてのご意見、お願いしたいと思います。

(荒井委員)

はい、おはようございます。

(矢ヶ崎部会長)

おはようございます。よろしく願いいたします。

(荒井委員)

はい、3ページです。ポンチ絵のサステナビリティの「Leave No Trace トレーナー・GSTC トレーナー等取得」のところについてです。この言葉ですけれども、GSTC トレーナー取得は、基本的に（註：難しくて）できない。これは私のような教える人のことになるので、この言葉を変えて欲しくて。サステナブルツーリズムプロフェッショナル証明書を取得というのが、トレーニングプログラムの受講した次のステップになるので、そういう言葉にしたいです。

補足説明としては、GSTC トレーニングプログラムを受講したら、まず、修了書がもらえます。その後、試験があって、その試験をパスすると証明書がとれる。今ので、通じるでしょうか。

(矢ヶ崎部会長)

なるほど。取得の一步前ですよ。

(荒井委員)

はい。

(矢ヶ崎部会長)

石山さんどうぞ。

(石山委員)

この件、私も絡んでいるので、補足させてください。GSTC トレーナーというのは、私もチェック漏れなのですけれども、非常にハードルが高くて、現状なれる方が非常に少ない。Leave No Trace のトレーナーとはレベルが違うので、そこについて表現を変えた方が良いというのは、私からも言わせてください。

サステナブルガイディングトレーニングプログラムの上として、2泊3日の GSTC による公式プログラムがあって、その受講をして、荒井さんが言った合格証を得るとというのが、上のステップという形で、私も理解しているのですけれども、荒井さんそれで間違いないですか。

(荒井委員)

そうです。

(石山委員)

そのように、はい。

(矢ヶ崎部会長)

はい。それではここ、表現をちゃんとやった方がいいですよ。まず、取得という言葉を変えていただくことですが、どういう言葉がいいでしょうか。

(石山委員)

公式プログラム受講資格というのはどうなのでしょうかね。

(荒井委員)

資格ではないです。テストで 85 点以上取ったら、「サステナブルツーリズムプロフェッショナル証明」をしてもらえる。もし言うとしたら、それしか言えない。GSTC に関しては。

(石山委員)

プロフェッショナル。

(荒井委員)

証明書が発行されます。GSTC から。

(矢ヶ崎部会長)

証明書を持っている人、という表現をコンパクトにできれば良いということですね。

(荒井委員)

要するにそういうことです。

(山崎観光振興監)

提言の 2 ポツ目の表現のところですか。確認ですけど。

(矢ヶ崎部会長)

3 ページの、ポンチ絵の上のサステナビリティのところのすぐ下の枠の表現です。

(山崎観光振興監)

そうすると 15 ページも変えていかないといけないなと思いました。

(矢ヶ崎部会長)

本文に対応するところは変えなければいけませんね。

(山崎観光振興監)

そうすると、これは並列で書いているから、並列で書かずに Leave No Trace トレーナーと GSTC から発行される証明書とかそういう言い方にした方が良いのですか。

(荒井委員)

はい。

(山崎観光振興監)

Leave No Trace トレーナー・GSTC から発行される証明書、とか。

(荒井委員)

それで。

(石山委員)

それがベストだと思います。

(山崎観光振興監)

これで良いですか。

(石山委員、荒井委員)

はい。

(矢ヶ崎部会長)

大丈夫でしょうか、それで。

高田さん、今、ミュート外されましたけど、何か補足されることとかありますか。

(高田委員)

大丈夫です。

(矢ヶ崎部会長)

海外の資格は、段階が、日本ではなかなかなじみのない進み方をすることもありますね。私の知っている範囲だとまずキャンディデート。何か次の上に行く資格をとるようなキャンディデートというような言葉を使うこともありますし、なるべく正確に、少し言葉はもたもたしていてもなるべく正確な日本語にしていく方が、今は誤解がなくて良いと思いますので、そのようにしていただければと思います。ありがとうございます。

荒井さん、他にご指摘事項ございませんか。

(荒井委員)

続けていきます。高田さんと相談したいなと思っていたのですが。6ページです。高田さん。

(矢ヶ崎部会長)

同じ資料の6ページですね。

(荒井委員)

そうです。このガイドの日数ですね。2年間で200日間、つまり1年間で100日間、ざっくり10ヶ月で割ったら月10日間くらいのガイド経験があれば良いだろうと。妥当かなと思いつつ、月10日間は、最初日数が多いかなと思ったのです。

(高田委員)

僕も最初多いかなと思いました。

(荒井委員)

月 10 日間ということは毎週末、土日ずっとガイドすれば良い。

いや、結構多いですね。実は。

(高田委員)

結構なものだと思いますよ、量的には。カヌーとかだと、もしかしたらいけちゃうのかも分からないけど、山岳なんかはすごくきついかもしれない。

(荒井委員)

山岳もそうですが、ダイビングとかスカイダイビングのカウントって、何回飛んだ、じゃないですか。ネイチャーガイドが 1 日 2 回やるのを 1 と数えるのか、みたいな議論が各分野によっては出てくると思います。みんなから。そう思って、日数が適切かどうか。

(高田委員)

1 回を区切ってカウントするしかないと思います。

(荒井委員)

なので、100 日だと結構ガチです。感覚としては。本当にプロを目指して毎日やるのだというくらいの日数だよ、というのが、我々からガイドへのメッセージになると思います。それで良いですね。良いのかな。という悩みがあります。事務局さんどうぞ。

(山崎観光振興監)

時間換算とかの方が良いですか。

(荒井委員)

でもそれでは複雑になりすぎるなと思っているので、僕は日数が分かりやすいと思います。

ネイチャーガイドが朝晩 2 回やろうが 1 日としてカウントしていく方が、シンプルで良いと思います。いろんなものがあるので。

(山崎観光振興監)

朝 3 時間、午後 3 時間やれば 6 時間になるので、時間換算だとそっちはやりやすいかなと思いつつも、おっしゃるとおり複雑になってしまうので。

(荒井委員)

山岳は逆に長いですよ。

(高田委員)

山岳はきついと思いますよ。

(矢ヶ崎部会長)

鈴木さんどうぞ。他の方もどうぞご発言されてください。

(鈴木委員)

ワーキンググループの時にも同じ議論になって、結論は出ていなかったと記憶していますが、例えば本当に現役バリバリで顧客評価も高い人が 199 日だったらどう評価するかとか絶対出てくると思うのですね。その時にアナログな、例えばマスターガイドとかそういう人が担保をといるところがあるので、今は 200 を目安にしていますが、運用上、今後、その前後というのは考えられるのかなと記憶しています。もっと言っちゃうと、川モノのラフティング 199 日、SUP 0 日、カヌー 1 日の人に SUP のガイドを頼めるかという、僕はしんどいと思う。ただ、川でのレスキューができるということでは、この 3 つを共通と認識していて、これはこれで丸だと思っているのです。ただ、実際の運用が始まったときに、ちょっと考えるという含みは残しておいた方が良くないと思いません。

(荒井委員)

それができたらありがたいです。

(鈴木委員)

今の段階では僕はこれがベストだと思っている。

(荒井委員)

そうですね。

(鈴木委員)

ここから、あくまで目安とする的な、ちょっとコメントあっても良いかなと思います。

(矢ヶ崎部会長)

これは大事な論点だと思います。荒井さん、提案いただきありがとうございます。
他の皆様方もどんな風にお感じになるかご意見をいただきたいと思います。いかがですか。
石山さんどうぞ。

(石山委員)

アクティビティガイドのヨコの広がりのところ。整理をしていただいて、一旦は SUP とサイクリング JCTA 部分を今回確実に入ると整理をしていただきましたので、あとはここから更なる拡大に向けた動きと、米印がついているように、まだ確定で取り組まれていないことがあるので、ここをしっかりとウォッチしながら、ガイドさんを増やしていく取組が引き続きできれば良いなと

思っています。

あとは、一旦はこのまま進めていくのが良いかなと思ひまして、今日の日数問題はスルーガイドもやはり同じような問題がありまして、200日にするのか、150日にするのか、100日にするのかという形でかなりいろいろな方からご意見があったのですけれども、一旦はベース的なところで、添乗員経験者も通訳案内士も100日でスタートしようという形で進めていまして、これも次の見直しの時にはその辺も含めてしっかりやっていくということで確認させていただいています。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございました。八木さん、いかがでしょうか。

(八木委員)

八木です。先日はありがとうございました。日数のことについてはこれまで議論されてきた結果だとわかりますが、今までのお話を聞いていると、山岳は少なくとも200はきつというところだけ先のお二人の意見で気になったので、このままいくか、山岳だけでも一回見直すのかというのは、どうするのでしょうか。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。どうでしょうか。山岳を見直すということもあろうかと思いますが、全体をまずはこの示された日数、2年間での日数を目安ということにして、そしてこの日数だけでバシッと決めるわけではないので、他の要件も勘案した上で、ガイドとしてどうか、ということを考えていくという制度設計。そして皆様方、共通して仰っていたのは、ちゃんと見直しをかけるぞと。この制度がより良いものになっていくために、制度自体のPDCAサイクルをかけていくぞと。見直しをかけた時に妥当かどうかちゃんと検証していきますよ、ということが入っていれば、まずは目安として良いかなというご意見かなと思ひますが、どうでしょうか。

(奥水課長)

一点よろしいでしょうか。今日は詳しく説明していなかったのですが、資料編というものが資料の中に付いているかと思ひます。そちらの16ページをご覧ください。

部会の議論とは別にワーキングを設置して、有識者の方々にもヒアリングをして今日の部会に臨んでいるところです。山岳の200日の根拠につきまして、北海道山岳ガイド協会の佐藤事務局次長に確認しております。その道の専門の方にきちっとヒアリングをして200日が妥当であるというご意見をいただいておりますので、一旦はこの200日でスタートさせていただいて、その中で運用上厳しいというところがあれば、今後見直しの中でやっていくというような形で進めさせていただければと考えております。

(鈴木委員)

良いと思ひます。

(山崎観光振興監)

先生が先ほど取りまとめていただいたように、これはあくまで目安ということで、総合的に勘案してやっていくということと、PDCAを回してしっかり見直していくということで。我々もこれが絶対値だとは認識しておりませんので、そういう形でやっていく。必ず今回の資料にその旨付記するという形でいかがでしょうか。

(矢ヶ崎部会長)

皆さん頷いて下さっていますので、合意がとれたと思います。

今、仰っていただいた見直しをきちっとかけていくということ自体が、制度自体がいろんな方から評価されていくかどうか、支援されていくかどうかのすごく大事なところなので、そこは補記と言わず、明記をしていただきたいと思います。よろしくお願いします。みんなで育てていく制度にしたいですね。

では、他にご指摘事項ございましたら、どうぞお時間ありますので仰っていただければと思いますが、いかがでしょうか。審議会前の最後の部会になりますので。

(荒井委員)

7ページのアクティビティガイドの分野拡大についてのところ。私はこれで納得して、良いなと思っているのですがけれども、これにあたって起こりうる矛盾とか問題ってもう一回確認したいと思って。そこだけ何か共有できれば、これを出しても良いかなと思いました。

もし何かこれまで他に挙がっている点、悩んで、悩んで、とりあえずこの形に置いたのだよというものが他にありましたっけ、という私の質問です。興水さんに対してですかね。もしあれば。

(興水課長)

問題点は整理して、こういう形でまとめさせていただきました。

(荒井委員)

この前の議論の繰り返しになりますけど、今までないところにうまく制度を作ろうとして、多分これを世の中に出したときに、例えばサイクリングガイドから「あーだ、こーだ」って来るなと僕は思っているのですね。それとか、バックカントリースキーのガイドから「全然現場と合っていないよ」みたいなのか、まだこんな資格もあるな、と出てくる中で、我々でなんとかここまで落ち着けてきたので、私はこれで良いなと思っているのですが、他の皆さんでも、まだこの可能性はあるかもといったことを共有できるとリスクとして把握できるなと思っていますが、もし、皆さんあればお願いします。なければ良いのかなと。

(矢ヶ崎部会長)

石山さん、どうぞ。

(石山委員)

アクティビティの拡大については、今回最大公約数をよく探ったなと思えるのですが、多

分、この先課題になってくるのは、今、他の資格を持っている人たちが、本当に北海道アウトドア検定を受けてもらえるのだろうかとか、この資格自体にどういうインセンティブがあって、我々はなんで受けなければならないのかとか。制度は作っているものの、一人ひとりのガイドさんに、それをどこまで啓蒙できるか、浸透できるかというのは一番の課題というか、多分そこに問題があるなと僕は思っています。いかがでしょうか荒井さん。

(荒井委員)

確かにここからは、プロモーションというか、みんなで良いぞ、良いぞって使ってもらわなければいけないですね。ありがとうございます。

(矢ヶ崎部会長)

そうですね。どうでしょう。鈴木さんどうぞ。

(鈴木委員)

まさに今の話の延長線上なのですけれども、これまでの討議とは別の次元で、資料の「はじめに」というのがすごく寂しい内容だと思うのです。要は、北海道はアドベンチャーtravelを頑張るから、ATGSも含めて、新しいガイド資格制度を作るのだと。しかし、これはこっち側の理由だと思うのです。

何が言いたいかというと、ガイド向けに、これから北海道で若者が、アウトドアのビジネスによって海外から日本中からのお客さんを満足させ、北海道の付加価値を上げ、地域の住民の生活を豊かにし、俺たちも豊かになる。いわゆるSDGsでいう17項目の169を決めているのがこれまでに、前文がないのだと思うのです。2030アジェンダを読んでいる方は、169とか17とかは全然つまなくて、前文が面白いのです。前文の中身をここにに入れていかないと。1ページで良いから。なぜ私たちはこの制度を作って、最初に山崎さんが言った話があるべきだと思うのです。ガイドさんのために、儲けるために、北海道のためにこれをやるのだと。ニュースリリースしても、プレスが使うのって前文を一生懸命使ってくれると思うのです。そこが非常に大事な。それなしに、うちの制度はどうなのだとか、うちの資格制度をどうするのだとかガチャガチャ言う前に、初目的を確認しましょうよ、というところがあった方が良くないかと思いました。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。いかがでしょうか。素晴らしいご提案をいただいたと思っております。この資料は誰が発信する資料なのかというと、部会名で出て行く。表紙はそうなので。ここにいらっしゃる委員の皆様方が、この検討を通して、こういう制度設計の案だってお作りになられたこと、このプロセスの中に込められた思いですよ。もっと北海道の中でガイド文化が花開いて。ガイド文化は、北海道では世界的に見てもかなり水準が高くて、やる気がある方々が、みんなで盛り上げていこうとしている。素晴らしいガイド文化が花開く地・北海道というものを作っていくのだと。そのための第一歩であって、私たち部会としては、それを意識してこれを作り上げてきたと。不十分なところもまだ若干あるかもしれないけれども、見直しをしながらみんなで育てていって、ガイドさんと一緒にやりながら良いものにしていくと、みんなハッピーになる

のではないですか、っていうような。やっぱり。

(鈴木委員)

これに背を向けるやつはおかしいよって言えるような。そう思います。

(矢ヶ崎部会長)

そういう、ちょっと温度感のある文章があっても良いかなと思います。これから作り上げるものなので。多分、今申し上げたことは事務局の皆さん方はもっともっと燃えたぎる思いで思っただらっしゃると思いますし、それを例えば部会名、部会メンバー一同名で一文加えるということでも良いのではないかなと思います。

(山崎観光振興監)

「はじめに」は全文変えます。

(矢ヶ崎部会長)

「はじめに」自体の文章は必要なので、追加していただいたら良いと思うのですけど。

(山崎観光振興監)

冒頭、私からお話させていただいたのですけれども、アドベンチャートラベル対応が、前面に出過ぎている。あくまでアドベンチャートラベルにも対応したガイドであって、一番はガイドさんが稼ぐということと、利用者がこのガイドを持っている人をお願いしたら安心できるっていう。ここが一番重要だと思いますので、これを前面に出した上で、それがアドベンチャートラベルに対応しているのだ、というところで文章を変えさせていただきたいと思います。

(矢ヶ崎部会長)

どうもありがとうございます。皆さんからマルが来ています。

すいません、「稼げる」だけではなくて、「憧れられる」ということも入れて下さい。子どもたちがガイドになりたいって思えるというのは大事かなと思いますので。

八木さんいかがですか。手が挙がりかけましたね。

(八木委員)

私はメディアという立場でお話しようと思ったのですけれど、鈴木さんの仰るとおりで、「はじめに」って書いてあるこの文章自体がいけないのではなく、この内容は「はじめに」ではないと思うのです。なぜこれをするように至ったかの経緯として残しておいて良いと思います。「はじめに」については、最初に鈴木さんが言ったそのままを入れて良い内容だと思います。すごく明快で分かりやすく、一般の人やガイドさんたちにストレートに伝わるので、「はじめに」は鈴木さんの言葉にさせていただいて、現在「はじめに」とある文章は経緯ということで残していただく。というのは、例えば新聞社とか報道でも、「そもそもなんで」と尋ねられた際にこの文章は大事なので残す意味があり、両方を掲載していただきたいと思います。

(矢ヶ崎部会長)

完璧に整理していただきました。ありがとうございます。他の委員の方々も今ほどの整理でよろしいですか。ありがとうございます。

大変良いご提案をいただいたと思います。ありがとうございます。他にいかがでしょう。どんなことでも結構ですので。審議会前の最後の意見交換になりますので。大丈夫でしょうか。高田さん、どうですか。

(高田委員)

大丈夫です。

(矢ヶ崎部会長)

はい。鈴木さんはいかがですか。

(鈴木委員：画面上でマルのサイン)

はい。石山さんはいかがですか。

(石山委員)

大丈夫です。

(矢ヶ崎部会長)

八木さんは大丈夫ですか。

(荒井委員)

私ひとつ忘れていました。

(矢ヶ崎部会長)

何かあるかと思っていました。

(荒井委員)

15 ページの講師の GSTC トレーナーもこれ、僕 GSTC に聞いておきますと思いました。

サステナブルガイディングトレーニングプログラムの講師を GSTC 公認トレーナーとする、と書いてしまうと多分 GSTC に講師を派遣してくれというプロセスが生まれ、ちょっと面倒くさいのです。アメリカに連絡とって、みたいな。なので、なんと書けば良いのか判らないですけど、それと同等の者とするとか。石山さん、ここ何か考えさせてください。

(石山委員)

はい。承知しました。早急をお願いいたします。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。確かにそういうところ厳しそうですね。契約社会における彼らとし

ては、分かりました。細かいところまで行き届いたご指摘いただきましてありがとうございます。

それでは皆様方のこの資料についてのご指摘については以上ということにさせていただければと思いますが、大丈夫そうでしょうか。

(意見等なし)

ありがとうございます。それでは、新しいガイド制度のあり方に関する提言につきましては、今ほどいただきました修正も含めまして、事務局の皆さんとご相談しながら、私、部会長にご一任いただきまして、9月9日に開催予定の北海道観光審議会において部会案として説明させていただきたいと思います。説明がんばりますので、こんなことでよろしいでしょうか。ありがとうございます。

それでは続きまして、次第「4 意見交換」に入っていきたいと思います。

部会全体を通してお気づきの点とか、今ほどのお話の中にも、ちょっと先の話も入ってございましたけれども、今後のこの制度のあり方ですとか、またガイド制度にとどまらず、北海道におけるアドベンチャー・トラベルの推進全般に向けてなど。あるいは、ワーキングなどいろいろな経験を通じてお感じになったことを、少しざっくばらんに皆様から頂戴したい、こういう時間にしたいと思います。どなたかからでも結構ですので、今後についてを含めた意見交換ということでお願いします。事務局の方もどうぞ、ざっくばらんに入っていただいて結構ですのでお願いします。

(山崎観光振興監)

では、契機として2点ございます。先ほどお話しがあったとおり、どのようにこの制度を周知していくか、ここはひとつ大きなポイントだと思っております。それはガイドの皆様に対してもそうですし、マーケットに対してもどう広めていくか。ここは、これから考えていかなければならないと思っております。

それともう1点、これは本当に難しいので、結論はすぐにできるものではないのですが、短期、中期、長期で、このガイド制度をまわしていく、運営していく主体をどこにすべきなのか。その団体といいますか、運営主体。この問題というのは、制度の外なのですけれども。この2つを考えていかなければいけないという風に思っております。ご意見いろいろあれば、ざっくばらんにいただければと思っております。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。今ご指摘あった2点、加えて他にも気になる点があれば、大歓迎です。また、今のお話の点については、1、2、という風にやっていくのではなく、言いやすいところからどんどん言っていただいて結構だと思いますが、いかがでしょうか。

鈴木さん、その次石山さんでお願いします。

(鈴木委員)

今の山崎さんの話を聞いてなのですが、新制度が始まって、まだ誰もガイドが認定されていませんという段階からATのビジネスはどんどん進んでいくので、まず、第一段階として、この人たちは間違いないよねという方、多分ワーキンググループのメンバーになっていた方とか、既にそういうガイドとして動いている方を、名誉会員ではないです、マスターガイドにいきな

りするかという議論は必要ですけど、みんながああなりたいよねと憧れられる方をズラっと最初に並べることが、マスコミに対するリリースも良いでしょうし、若者が憧れる対象としても良いと思う。

制度運用の大前提として、この方々が私たちの AT ガイドですと。もちろん裏でちょっと仕掛けをしなければいけないですけど。少なくとも渡辺敏哉さん、ちゃんと北海道アウトドア資格制度の基本編は目をつむってやってねとか、そういうことはすりあわせしなければいけないと思うのですが、大事なポイントかなと思います。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。

(鈴木委員)

そうすると旅行会社も使いやすい。

(矢ヶ崎部会長)

確かに立ち上がりはすごく考えなければいけないですね。石山さんいかがでしょう。

(石山委員)

プロモーションについては2つあると思っていて、1つは国内市場向けにこの制度をどうやってアピールしていくかという話と、あとは海外にどうアピールしていくかというところでいくと、まず海外の方は割合わかりやすいと思っていて、ATWSの本番が来年あるので、そこで大々的に、日本をアピールしていく場を公式プログラムの中に盛り込んでいくとか、日本の紹介の時に大きくアピールできるような形がとれば良いかなと思っています。

日本のところについては、ガイドさんの情報すら整備されていないので、そこをしっかり整備をした上で、先ほどのこういう形で我々はここを目指していきますという中で、宣言をするようなものを作っていけば良いのかなと思います。まずはそこからかなという風に思っています。

一方で、認定ガイドさんの招致のしかたについては北海道観光振興機構の事業でも検討されていると聞いていますので、うまく表現できるような形になっていけば良いのかなと思っています。

それから2番目のご質問については、どの部分を認証の部分として、外部委託をしていくかというように考えるのかという仕分け作業の話になっていくかなと思いますので、現制度との整理をした上で、棚卸しをして、この部分を外部に、この部分を従来の部分に、いやそこも含めて全部変えるのだというところからスタートした方が、いろいろ動きやすいかなと考えています。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。他の皆様方、いかがでしょうか。

八木さん、今ほど、制度がきちっと立ち上がってくるまでの間、北海道にこういうガイド在りということで、マスターガイドさんのような方々を広くご紹介するという、中々素敵なことだと思うのですが、どんな感じに思われますか。

(八木委員)

私も今まで雑誌でガイドさんを「点」でしか紹介したことがないので、全体を俯瞰で見せてほしいと思います。前にもポータルサイトのようなものがあって、ガイドさんの顔がズラッと並んでいて、その人がどういう資格を持っていてどうなのかということが分かるウェブサイトがあると良いな、と話したと思うのですが、北海道でどのようなガイドさんがいるのか、知っている人から見ると凄い面々だし、分からない方々にあってもこの方々なら安心ですよと見ることの出来るものが必要だと思う。

また、旅行者の側から見ると、例えば大手旅行代理店や有名な旅行会社がこのガイド制度を必ず使いますよというような、何かそういったものが同時に見えていると良い。制度の立ち上げだけだと一般の人にはピンとこない部分があるかもしれないので、旅行を申し込もうと思う人は、有名な旅行会社や北海道の地場の旅行会社がガッチリこれを行っていますよということが見えると、フリーのガイドさんにとってもガイド制度を取得していれば旅行会社からお仕事を貰いやすいとか、イメージが付きやすいと思いました。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。立ち上がりのプロモーションは、きめ細かく考えていった方が良いような気がしますね。旅行に行くぞ、ガイドが必要だぞという気持ちになった人はガイドの検索をしますけれど、それ以前の段階にある方々、ガイドとかよく知らない、でもガイドさんと一緒だともっと深い経験が出来るのに、というところから知っていただかないといけない段階の方、その段階を過ぎて、実際に行こうと思ったら、やっぱり大手旅行会社さんが使っているということで安心できる方、あるいは高田さんのところのように、地元の有名な宿泊事業者さんがガチッと持っている、ここだったら絶対安心というようなものであるとか、あるいはガイドさんと一緒に旅をしたらこんなに楽しいよという周知本、ガイドブックのような、そういう雑誌の記事が常時あるとか、多方面から必要になるかもしれないですね。

高田さん、いかがでしょうか。プロモーションの件でも、これから回していく組織の件でも。

(高田委員)

ポータルサイトを作ってもらおうというのは良いことだと思いますけれど、逆に八木さんのところで、そういうガイド一覧みたいなものを作って貰えないですか。

(八木委員)

お仕事をいただければ喜んで。もしかしたら、鈴木さんの会社の方が適しているかもしれませんが。

(鈴木委員)

まさに、ポータルサイトも、八木さんのところでメディアを作っていくにしても、最初のラインナップが必要だと思うのです。そこに、例えばですけど、高田さん、安藤さん、渡辺敏哉さん、荒井さんが入っていなかったら、話にならないと思うのですよね。この話を具現化すると、

この制度のスタート時点で、北海道が考える AT ガイドというものが、これから新しい人を増やすための入り口を作っているわけで、もう既に仕上がっている人は全員認定してしまった方が良くと思うのですよね。ただ、そこに論理的な整合性は必要なので、ちゃんとやることはやってねと、チェックは必要だと思うのですけれど、バーンと 30 人、50 人が揃っていて、この人たちの仲間に入るには、この制度をクリアしないといけないのだよという形に持って行きたい。

前に、高田さんが道東で仰っていた、ATWS の閉会式でズラッと北海道認定 AT ガイドが並んで、これから北海道で待ってるぜ、と言うとか。そこまで、今回折角作ったものをぶつけたいなと思います。

(矢ヶ崎部会長)

いかがでしょう、皆さん。イメージが膨らんできましたね。

(荒井委員)

賛成です。あとは、ガイドがガイド同士で価値を高め合うということが良いので、そういう関係性を、現場のガイドとしては作っていききたいなという思いです。

(矢ヶ崎部会長)

大事なことですよね。

(高田委員)

飲食店とかもそうなのですけど、例えば、大雪に行くのだったら荒井さんに行ったら間違いないよとか、一言いうと確実にそこへ行くのですよね。そういう部分では、ガイドがガイドを高めていくということは、非常に良いことだし、きちっとした繋がりを、今後持って行くような組織にしていければと思います。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。私もこうだな、と思います。ガイドさんと一緒に旅をすることの深さ、楽しさを分かってくると、今回は山を登るのにこのガイドさんと一緒に行ったんだ。でも、今度北海道に来るときは、SUP をやりたいのだけれど、別のアクティビティのガイドさんを紹介して貰えませんか、とか。そのように広がっていく。旅行者の側が行うアクティビティも、ガイドさん同士の繋がりがあるということを通じて広がっていくと思ったりしています。

(鈴木委員)

世界の富裕層を相手にしている、日本でいうと、THE RYOKAN COLLECTION とか。皆入りたいのだけれど、中々難しいわけですよね。でも、あれは最初に福永さんがバーンと決めたから、ここが基準だと決まったから THE RYOKAN COLLECTION は動いているような気がして。そういうのがあっても良いかなと。今回関わって下さっているメンツプラスαで、ガイドさんがガイドさん同士を推薦し合える中で、まずは道庁さんも事務局側でチェックをできる人たち。変な芽が出たら終わっちゃうので、かなり慎重にしなければいけないのですけれど、そこはこの延長線上であって

も良いかなと思います。

(矢ヶ崎部会長)

福永さんの THE RYOKAN COLLECTION の話は参考になると思ってお聞きしていました。とにかく、粒ぞろいなのですけれど、加えてある一定の量が必要だという考え方を福永さんは持っています。存在感を持って。数人これがこうですよ、ではダメですよ。2桁ですよ、やっぱりね。インパクトが大事かなと。

いかがでしょう。ここまでのご発言をお聞きして、事務局の皆様もどう思われたか。

(山崎観光振興監)

立ち上げのマスターガイドはすごく良いなと思いました。どういう理屈を付けるか、というのはあるのですけれど、先生も仰るように、ある程度、2桁のマスターガイドがドンというところが、制度の周知、ガイドさん側にも、利用者の側にも、周知になっていくなということと、ポータルサイト的なもの、これが一番手っ取り早いというとあれですけど、観光振興機構のホームページがかなりリニューアルされて、アクセスも伸びてきていますので、その中にしっかり、AT のページとガイドのページというのをしっかりと作っていく。

この後、北海道観光のアプリを、今までの単なる使えないアプリではなく、使われるアプリの開発を始めているところですので、そうすると、多くの方が、今はパソコンよりもタブレットやスマホから検索していくこととなるので、アプリの中でもしっかりとガイドさんの検索とか、ポータル的な部分が出来るといふ、パーツを埋め込んでいくことも考えたいなと思っております。色々な前向きなアイデアをいただきまして、ありがとうございます。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。きっと、前向きなアイデアはまだこれから出てくると思いますので、ちょっとお話を進めていきたいと思います。

プロモーションのことも、立ち上げてからどこが回すかのことも結構ですので、いかがでしょうか。どこが回すかということはすごく大事な議論なので、何をしなければいけないのかという、今後回す組織が行うべきタスク、ちょっといくつか明確になっていると、話はしやすくなるかもしれないですね。これとこれはコアで、出来ればこれも出来ると良いかな、みたいな。組織ありきというよりは、何をやっていくべきなのか、というところを外さないように組織組みをしていく必要があるかなと思います。

(鈴木委員)

凄いいろ向きの話で、色々な方と今回お話をしている中で、今のガイド資格制度に関して、運営体制、運営組織に対して批判をしている方がいたのです。彼が全部正しいということではなく、バイアスがかかっているとしても、反面教師で、これがこう変わりますというところていくと、前のダメだったところは、ちゃんとリストアップして、それを修正するというのを考えると、とっつきやすいかなと思いました。

(矢ヶ崎部会長)

大事だと思います。反省して、何をやらなければいけないのか考えて。そしてそこから正しい組織を作っていくということですよ。組織ありきではないですよ。

(鈴木委員)

どこにやらせるか、というのを考えると、答えはある程度絞られてしまうのですが、機能的に、運営には何が必要なかということから入らないと、バックキャストしないと、多分、しょうがないよねと、また固まっていってしまいそうな気がしています。

(石山委員)

今までのお話ですと、現制度については既存の組織が運営をしていって、この新しい制度だけ新たにという。勘違いだとあれですけど。そういう受け取りをしているのですが、結局、今、議論をしているところは、オールオールで取り組んでいかないといけないところだと思いますので、既存の資格を持っている方々の部分についても大きく意識を変えていかないと、全体が動いていかないような気もするので、それが、私が先ほどお話しをさせていただいた、どこまでやるのか。既存の部分を取っ払って構築していくのか、今回の新しい制度のところだけやっていくのかというのは、非常に、考え方の基準になってくるので、そこが僕としては、スタートラインをどう作っていくかが一番大事なのかなと。改めて発言をさせていただきました。以上です。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございます。多分、推測するに、今のお二方のお話を総合すると、色んな背景があって、こういう言葉になっているということも含めた上で、事務局の方で案をお考えいただけるのではないかと思います。折角良いものを作るので、少し勇気を持ってやらなければいけないところもあるのかな、と思いつつですね。

加えて、やっぱり、新しい動きに対して、ご理解を色々な方からいただいていくということを考えると、是非、八木さんのお力で、色々な方に広めていっていただくことに加えて、道としても、親しみやすい形でシンポジウムなんかを何回かやって、こういうことですよ、一緒にやりましょうという機運を盛り上げるようなことも、やっぱりやっていただくのだろうなと。全道でやることも大事ですし、フィールドになりそうな地域をいくつか重点的に、きちっとカバーした形できめ細かな開催をするのも大事かもしれません。そういうきめ細かな合意形成も併せて、組織とやっていく必要があるかもしれませんね。

(荒井委員)

これ、資格制度の方は厳格に制度にしておかないといけないので、淡々と制度は作っていく。別途、イケてるガイドたちが、わいわいガヤガヤ、後継者も作ろうぜ、オーッとやっていて、資格を取っておけよ、となるようなイメージでいて、国際認証の GSTC トレーナーとかをやっていると、メチャクチャドライに、淡々と、地域認証はただただ出すと。そうしておかないと、賄賂じゃないですけど、うまくやってくれというなことがすごく働く分野になってしまうので、ちょっと組織諸々あれですけど、先ほど鈴木さんが仰ったとおり、今、うまくいっていない点を

洗い出して行って、制度としての課題は何なのか、それを解決して、合理的にコストがかからず気持ちよく分かりやすいスタンダードを作っていく、資格発行をしていく。あと、その価値を高めていくのは、やっぱり、周りがあれば良いよねと高めていくわけなので、こっちはこっちで考えなければいけないのだなど、今頃整理をしています。自分の中で。ATは良い風ですよ。ATWSとか。価値を分かりやすく出しやすい場なので。まずはそこまでです。

(矢ヶ崎部会長)

そうですね。しっかりした制度、しっかりした現場、回していく組織。また、全体をガバナンスしていくのは、やっぱり北海道庁さん。全体をしっかり見ていくという機能は忘れないでいて欲しいと思います。道民の理解は得られているのかとか。現場でなあなあになるようなことがないのか、海外はドライな契約社会でもあるのだよねとか、全体が健全な発展をしているのか見ていくというガバナンスの機能は、是非、北海道庁さんには手綱をしっかり見ておいていただきたいかな、という気はします。

すいません、私もちょっと、感想めいたことを座長なのに言ってしまって申し訳ないのですが、いかがですか。他に。2点に限らず、お気づきのことを。今後に向かって、何でも結構です。八木さんどうぞ。

(八木委員)

今回、最後ということなので、これからのお話として雑感的な言い方になってしまいますけれど、ここまで素晴らしい制度ができたというのは評価すべきだと思います。ATの視察に行ったとき、その場においてガイドさん側からの厳しいご意見は聞いたのですが、制度自体は良い制度だと認めた上で、「こんな良い制度なのにちゃんと運用していない。こんなのを持っても意味がないと地元のガイドが言っているよ」というところが一番問題として言われていたので、制度そのものに問題があったから新しいガイド制度があるのではなくて、そもそもこういうアウトドアガイド制度を作った北海道が、さらに世界を意識した、こんなきちんとした制度を作ることによって良いと思うのです。ただ、これが使える制度なのかというところが、ガイドさんに伝わらないと、また同じことになってしまうので、目標がATWSではなく、これを持つことによって、ガイドの経営とかが担保されるような、確実に経営と直結したものになり、素晴らしい制度だからこそ宝の持ち腐れにならないようになれば良いと思います。

今後も紆余曲折ありながら、段々うまくいったら、北海道が本当に日本全国のガイド制度の模範になるのではないかと考えておりますし、今回、実際に視察をさせていただいた後で、現時点でこの制度は完璧だと思っていますので、まずは現実的に運用していく。将来的には「北海道らしいアウトドアって何だろう」という視点も加えていけたらと思っています。たとえば、この前の視察で、「ガイドで儲かるのは断然冬です」と安藤さんが仰っていました。現状ではグリーンシーズンが中心のものとなっているので、冬のアクティビティを今後は加えていくかということ。また、フィッシングとか狩猟といったものもこの前からお話が出ていますけれど、実際に山に入ったとき、山に入って野生動物を捕まえるというアウトドアは、北海道ならではのワイルドな部分もすごくある一方で、自由な感じになっていたり、密漁という問題もある。こういったものも、きちんと、今の制度にさらに加えていくようになれば、北海道でないとできない体験とし

て、付加価値が出るかなと思っています。

最後になりますけれど、私、今年の北海道遺産の選考委員に入りました。10月には、また新しい北海道遺産の認定が決まると思います。これからも北海道の地域に、文化的、歴史的にどんな価値があるのか、10月には新たな宝が加わってきますので、こいうったものも、各地域の人たちが盛り上げていって、海外から、全国から、道内からいらっしゃったお客様に対して、地域の魅力をアピールしていただく。その際に、こういったガイドさんたちの基盤がしっかりしているということが、できているということが望ましいと思っています。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございました。今、八木さんが最後ですからと仰っていただきました。大変良いご意見をいただきました。このノリで、皆様方にも、最後、ご発言をしていただこうと思います。石山さん、いかがですか。

(石山委員)

大変長らく皆様、お世話になりました。色んな議論ができて、最終的にはすごく、動いていくには良い形になったと思います。色んな形で、皆さん色んな角度からご発言いただいたことが、やっぱり何度か重ねていくと、こういう風に積み上がっていくのだなということは、今回改めて、皆さんと色々やらせていただいて、感じた次第でございます。時には遠慮なく、時には多少遠慮もして、というような感じでやってきたと思うのですが、非常に、最後は良い形にまとまっていたと思いますし、我々もそこに絡んだだけではなくて、これからも、現状でも色んな形でこの分野に関わっていかれる方だと思っていますので、引き続き、今後ともよろしく願っています。ありがとうございます。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございました。鈴木さん、いかがでしょうか。

(鈴木委員)

非常に、自分自身勉強をさせていただきました。ありがとうございました。この制度への思いは先ほどお話ししたとおりなので、なんとか、北海道のガイドが、格好良い、一番憧れの商売になるように。山崎さんが、イタリアのスキーリゾートに行ったとき、スキーどころか町の楽しみ方を全部案内してもらって、その女性ガイドが、なんと町では一番ガイドフィーとしては安い人だったと。もう、憧れの父さんたち、母さんたちがいっぱいいるのだという話が、北海道のあちこちで言えるようになれば良いなと思っています。この制度自体はまだひよこなので、これが強靱な大人になるには色々大変だと思うのですが、是非、ここの皆さんは勿論ですが、関わった人たちとか、絶対、背中を向ける人たちをどうこっちに向かせるかという、そういうこの仲間に、コミュニティに入らなかったら外れ者だよ、ぐらいの認識を皆でできればなと思います。今回、色々ありがとうございました。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございました。じゃあ、荒井さん、高田さんの順番にいただいて。

(荒井委員)

私も、制度を作るといのは中々経験できるものではないので、非常に勉強になりました。基本的な考え方としては、現場で困っていることを、制度で解決できればなという形で、こうやって意見を出させていただきました。今、これが制度になります。

次は、制度は使われて価値が高まるものですから、これから僕は一所懸命に使い倒してみ、他の観点から中身を使ってもらって、価値をさらに高めるとか、悪いところを直していく。次はそういうところに入るの、ここから仕事が増えるなど。頑張ります。ありがとうございました。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございました。荒井さんのご認識は全く正しいと思います。

では、高田さん、お願いします。

(高田委員)

まず、2年間、関わらせていただきありがとうございます。本当に、制度を作るといのは大変なことなのだ。事務局を見ていて非常に感じました。逆に、我々みたいにガイドとして尖っている人間がいるのに、よくここまでまとめたなと思って、本当に感嘆しております。本当にありがとうございます。

ただ、これは折角作って、さっき荒井さんからも言っていましたけれど、使えなければしょうがないので、我々がセールスマンになって、どんどん普及させていかなければいけないのと、きちっと道の方でも目を光らせて、おかしなことにならないようにだけ、思っています。本当に素晴らしいものが出来上がったと思うので、これをきちっと使って、日本も世界に肩を並べられるような、そんなガイド制度があるんだよというところを、これから見せていくチャンスかなと思います。

Adventure Travel Trade Association のワールドサミットが来年ありますけれど、これは、皆さんどうい風に思っているかは分かりませんが、スタートですから。我々のスタートと一緒に、来年はスタートなので、世界に売っていくスタートだということで、ちょうど良いタイミングでこれができるのかなと思っていますので、そこでバンと拵げて、それに恥じないようなガイディングをしていけるよう、我々も、ガイド自身が努力していかないといけないのかなと思うので、この辺、アドバイスを含めよろしく願いいたします。

(矢ヶ崎部会長)

ありがとうございました。皆さんからのお言葉を拝聴して、ジーンときてしまいますね。もう2年も経ちましたか。というのも、良いテンポで中身が濃く進んできたので、あっという間だったなという気もいたします。

では、最後に私からもちょっとだけコメントをさせていただいて、事務局にお返しいたします。皆様方と一緒に。まずもって、本当にありがとうございました。私がこの中で一番の素人な

のですけれども、毎回すごく楽しかったですし、勉強になりましたし、非常に良い経験をさせていただきました。制度設計をしなければいけないということで、座長に座らせていただいたのだと思うのですが、その前に、私自身は、ガイド文化というのを日本で育てなければいけないというのをすごく強く、昔から。昔というのは観光庁という役所に行っていたときなのですが、日本と海外の旅行者の消費行動を比較したときに、圧倒的に少ないのが、地元をよく知る、地元の資源を活用させていただいて、地元にお金を落とすしていくタイプの旅行行動、そこから出てくる経済活動の割合が、圧倒的に日本は少なかったのですね。これは何なのだろうということをもすごく思っていて、ガイドさん、この量もバラエティも質も足りないなというところが、ひとつ随分あるのだろうと思っていました。そういうところが、これから大きな突破口となって、この制度を使って、先に進んでいくのだなと思うと、本当に嬉しい思いがあります。でも、スタートラインですので、これからしっかり育てていくのは非常に大事だと思いますので、皆様方のご協力、引き続き必要だと思いますから、是非、よろしくお願ひしたいと思います。高田さんのお言葉にもありましたが、皆さん、共通して思っているんじゃないかと思いますが、よくここまで事務局の皆様方が、時には体を張ってまとめてくださったなと思っております。まずもって、事務局の皆様方の大変高い能力と、調整能力に、そしてその結果に、敬意を表したいと思います。本当にありがとうございました。

最後の言葉を言っていますけれども、まだ始まったばかりですので、引き続き、気持ちを引き締めて進めていきたいと思ひます。

それでは事務局にお返しいたします。

(鶴時局長)

矢ヶ崎部会長を始め、委員の皆様ありがとうございました。制度固めの議論など、本日も今後進めていく上でのたくさんのヒントをいただいたと思ひております。感謝しております。

これをもちまして、令和4年度 第3回アドベンチャートラベル部会を閉会します。本日は誠にありがとうございました。

(了)